新富町文化財調査報告書　第 54 集

祇園原古墳群 12

国指定史跡「新田原古墳群」史跡整備にともなう発掘調査概要報告書(12)

復元作業前の百足塚古墳

２００９

宮崎県　新富町教育委員会

序

宮崎県の一ツ瀬川流域は数多くの古墳群があることで知られています。このうち本町にある国指定史跡新田原古墳群は、古墳時代後期を中心とした日向地方最大の首長墓群を中心としています。

新富町ではこの重要な史跡を広く活用するため、平成９年に策定した基本計画をもとに調査を行っています。

本年度は一昨年策定した百足塚古墳の復元整備実施設計図をもとに、関係機関との調整をはかり、百足塚古墳の復元作業を行いました。作業はさまざまな工夫が必要な難しい作業となりましたが、地域の皆様を初め、関係者の皆様のご協力で、一通りの完成を見ることができました。皆様に感謝申し上げるとともに、今後も活用と保護の機運の輪が広がるよう努力いたします。

新富町教育長　　米　良　郁　子

例　言

１．本書は平成20年度に行った宮崎県児湯郡新富町に所在する国指定史跡新田原古墳群の史跡整備の概要報告書である。
２．整備は新田原古墳群登録記念物保存修理一般事業として文化庁の国庫補助金と宮崎県費補助金を受け、宮崎県文化財課及び新田原古墳群史跡整備専門検討委員会の指導のもと行った。
３．国指定史跡新田原古墳群は新富町内の大字新田に分布する古墳の指定名称であるが、古墳の分布は大きく４つに大別できるため、それぞれ塚原古墳群、石船古墳群、山之坊古墳群、祇園原古墳群と呼んでいる。今回の短期整備計画は祇園原古墳群を対象としている。史跡整備の短期整備計画は祇園原古墳群を対象としている。
４．本書の執筆・編集は有馬が行った。
５．本書で使用した位置図は国土地理院発行の２万５千分の１図を基に作成し、調査範囲図はそれぞれ現場にて平板測量した。
６．本書で使用する方位は古墳群分布図以外はすべて磁北である。
７．出土遺物とその他の記録類はすべて新富町教育委員会生涯学習課で保管している。

本文目次

Ⅰ．古墳群の位置と概要……１ページ
Ⅱ．既往の調査……５ページ
Ⅲ．平成20年度の事業……９ページ
Ⅳ．まとめ……18ページ

図版目次

図１　一ツ瀬川流域の古墳群分布……２ページ
図２　祇園原古墳群の古墳分布……３ページ
図３　百足塚古墳の復元設計図……10ページ
図４　百足塚古墳の復元設計図(断面図)……11ページ

写真図版目次

写真１　祇園原古墳群の古墳分布……４ページ
写真２　調査中の百足塚古墳……７ページ
写真３　祇園原古墳群の前方後円墳群…８ページ
写真４　百足塚古墳南西方向から……12ページ
写真５　墳丘西側に設定した丁張……12ページ
写真６　後円部東側に設定した丁張…12ページ
写真７　墳丘北側の外堤から後円部…13ページ
写真８　東側前方部隅角から墳丘……13ページ
写真９　東側前方部隅角から前方部…13ページ
写真10　東側の外堤を南から見る……14ページ
写真11　前方部前面の周溝と外堤……14ページ
写真12　前方部前面の重機による作業……14ページ
写真13　墳丘西側の重機による作業…15ページ
写真14　墳丘西側の重機による作業…15ページ
写真15　西側外堤の重機による作業…15ページ
写真16　前方部前面における人力作業…16ページ
写真17　前方部前面テラスの整地作業…16ページ
写真18　後円部第２段における作業…16ページ
写真19　親子で粘土をこねる作業……17ページ
写真20　粘土帯をつくる……17ページ
写真21　形になってきた作品……17ページ
写真22　西都原考古博物館の展示状況…18ページ
写真23　建物と犬の展示状況……18ページ

Ⅰ．古墳群の位置と概要

１．国指定史跡「新田原古墳群」と祇園原古墳群の概要

⑴　国指定史跡「新田原古墳群」の実態

国指定史跡新田原古墳群は一ツ瀬川左岸台地から沖積地に点在する古墳の総称である。

その実態は、現在の新富町西部（旧新田村）にあった古墳を行政単位で指定措置した結果の名称であり、その分布の状況や推測される古墳の築造時期から、本来は大きく４つの古墳群に大別すべきものである。現在はそれぞれを別の古墳と考え、東から塚原古墳群、石船古墳群、山之坊古墳群、祇園原古墳群と呼んでいる。

⑵　祇園原古墳群の概要

このうち、祇園原古墳群は一ツ瀬川左岸台地上にあり、154基の高塚墳が現存している。内訳は、前方後円墳14基、方墳１基、円墳138基、墳形不明１基だが、これまでの発掘調査で墳丘が消滅した円墳の周溝が40基確認されているので、古墳総数は194基に及ぶ。

古墳の分布は標高70～90mの台地上で、西側直下には一ツ瀬川が流れ、東は一段高い台地面になっている。また台地には南北に貫入する２本の谷があり、古墳群はこれら谷地形によって区分されたＡ～Ｄの４グループに大別できる。

墓域の形成は弥生時代終末期までさかのぼる。群の北東部高位台地で確認された川床遺跡には円形周溝墓・方形周溝墓を中心とした195基の土壙墓群が発見された。最近の調査によって、これら墓域の周辺の低位台地面には、竪穴住居を中心とした小規模な集落が確認されている。

古墳時代前期になると北西部に前方後円墳が２基登場する。詳細はわからないが、Ａグループの北西部に展開するグループは前期から中期にかけての築造である可能性が高い。

Ａグループは東側傾斜面を南北につらなって築造された12基の前方後円墳が中心である。前期には、台地北西端部に前方部が低平で後円部径に対して狭長な前方後円墳が２基（187号墳・195号墳）築造されている。その後、同形の前方後円墳は継続しないが、５世紀中頃になって大久保塚古墳が造られる。表採される埴輪や墳形は、先述のように西都原古墳群の女狭穂塚古墳や茶臼原古墳群の児屋根塚古墳に類似するため、近接する時期に築造されたものと推測できる。５世紀後半には大久保塚古墳に継続する古墳はみあたらないが、今後の調査で中小規模墳の築造時期がわかれば、古墳群築造の連続性を明らかにできる可能性もある。

６世紀になると前方後円墳の築造は爆発的に増加し、墳長60～100mの大型墳と墳長60m以下の中規模墳が築造され、その多くで埴輪が樹立されている。ほとんど調査されていないので、詳細は今後の検討課題であるが、埴輪の観察から、前者は59号墳→百足塚古墳→68号墳→弥吾郎塚古墳と連続し、後者は水神塚古墳→機織塚古墳→52号墳と連続して築造されたと予想される。これら大規模墳と中規模墳は併行して築造された可能性が高く、古墳群全体としては中小の円墳を含めた階層構成型の群構造であると考えられる[(7)]。

Ｂ・Ｃグループは前方後円墳をそれぞれ１基づつ含む後期群集墳である。特にＢグループではほ場整備にともなう調査で36基の消滅墳が検出され、周溝に掘られた二次的埋葬施設と考えられる地下式横穴が５基検出され、近接して４基の馬の埋葬土壙もあった。これら群集墳の築造は、出土した須恵器を検討すると、TK10型式併行期に始まり、MT85型式をピークに、隼上りⅡ型式まで継続するようだ[(8)]。

Ｂグループの霧島塚古墳は詳細不明だが、Ｃグループは前方後円墳の139号墳ののち、140号墳(円墳)・138号墳（方墳）と続く終末期の一首長墓系譜であり、石船古墳群のように６世紀後半に登場したものだろう。祇園原古墳群はこれらの首長墓群を中心に、小円墳が数多く築造され、その結果、大きな古墳群となったのだろう。また群集墳の築造が終息し、２次的埋葬が行われるなか、Ａ群の北部高位台地斜面に横穴墓群が築造されている。

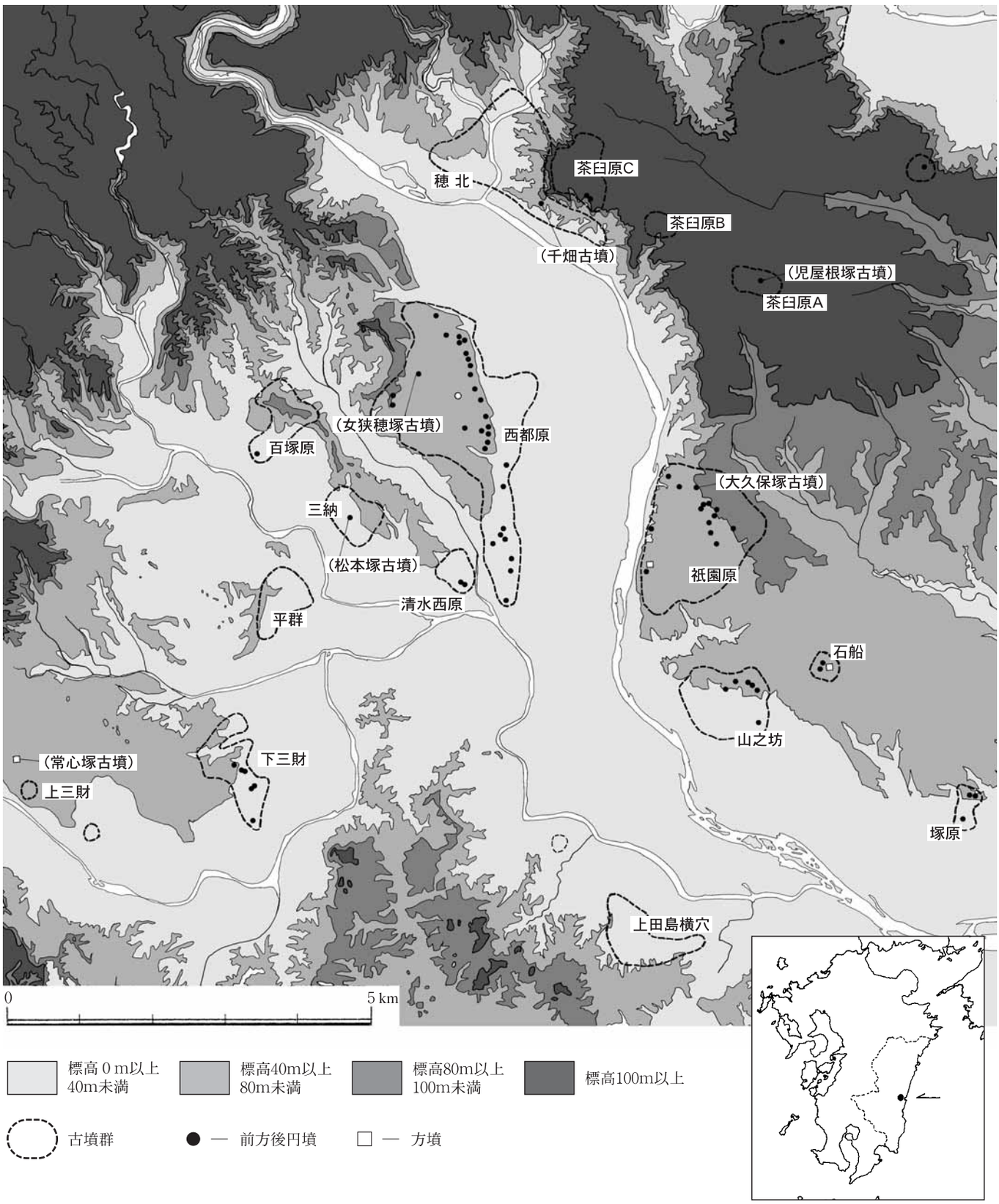

図１　一ツ瀬川流域の古墳群分布

図２　祇園原古墳群の古墳分布

２．整備までの経緯

新田原古墳群は昭和19年に指定措置を受けてから昭和40～50年代にかけて公有化がなされてきた。それら指定地は町が管理している。しかし公有化された墳丘は保護の対象でありながらも、その周辺に存在する埋没した周溝や、古墳を取り巻く築造当時の地形など重要な考古学的情報は十分把握されていない。

このような状況のもと、指定措置から半世紀以上が経過し、建造物が古墳どうしの視界を遮り、農地のほ場整備によって旧地形が変化するなど、古墳を取り巻く周辺環境が大きく変化してきた。また平成４年度に祇園原古墳群が分布する祇園原地区でほ場整備が計画されたのをきっかけとして、平成７年度から追加指定措置と指定地買収を行い、平成８年度には積極的な史跡の活用を目的に「新田原古墳群史跡市営美基本計画」を策定した。

基本計画の骨子は「古墳の保存整備と同時に畑地のなかに点在する古墳の風景をさらに良好なものとし、歴史と自然が融合した景観整備を行う」ことであり、対象面積が広大であるため、短期・中期・長期からなる30年以上の計画とした。

３．短期整備計画

短期整備の範囲は、「新田原古墳群」のなかでも公有化率が高く、前方後円墳が多く分布する祇園原古墳群Ａグループを対象とした。Ａグループは墳丘や周溝を含めた古墳間が連続して町有地であるため、見学者の利便性にあった整備がしやすい。短期整備では、①主要な前方後円墳の

写真１　祇園原古墳群の古墳分布

復元、②ガイダンス施設の設置、③見学園路の整備を目的とした。

整備期間は平成９年度から20年度までの13年間で、10年間にわたる発掘調査で百足塚古墳と59号墳の基礎データを整理し、墳丘復元やガイダンスでの展示を予定していた。

平成17年度には基本計画をより具体的に整理し、短期整備計画区域の整備方針として、Ａ群を３つの段階に区分し、百足塚古墳・59号墳・68号墳の３基を含む第１期整備優先区域を５ヶ年間で整備する実施計画を立案した。

平成18年度には、百足塚古墳の復元のための実施設計を行った。設計に際しては、各調査区のデータをもとに、遺存している墳丘面と築造当初の墳丘の予測を行い、遺構を保存すべき被覆土と掘削すべき埋土量の計算を行っている。

Ⅱ．既往の調査

１．整備事業までの調査

はじめて祇園原古墳群の記録が登場するのは、明治32年のことである。宮崎県を訪れた坪井正五郎は古墳群を巡見して、円筒埴輪列が残る古墳が存在することや、横穴式石室を採用した前方後円墳があることなどを略述している。この巡見の際に表採された形象埴輪は八木奘八郎によって紹介されたこともあった。

その後、大正４年には京都大学助手梅原末治（のちの同大学教授）が西都原古墳群の調査に関連して児湯郡一帯の古墳群を巡見し、その結果を「日向西都原周辺の古墳」で紹介している。主要古墳の名称が紹介されたのはこの時は初めてである。

昭和19年に国指定史跡となってからは調査の手が入ることがなく、本格的な調査が始まったのは最近になってからである。平成元年には新田原古墳群管理策定事業の一環として、古墳群の航空測量が行われ、その概要は平成５年に報告されている。

平成３年度には、祇園原古墳群でほ場整備を目的とした発掘調査が開始され、昭和のはじめ頃に消滅した円墳36基の周溝が確認できるにいたった。周溝には２次的な埋葬主体部と考えられる地下式横穴が５基発見されている。また周溝に隣接する状態で発見された馬の埋葬土壙が５基発見されている。

平成５年度からは祇園原古墳群で宮崎大学考古学研究室との合同による墳丘測量調査がおこなわれ、祇園原古墳群の前方後円墳のほとんどが測量図作成されるにいたった。

２．整備事業における確認調査

史跡整備事業における確認調査は、これまで百足塚古墳（新田原58号墳）と新田原59号墳の調査をおこなってきた。

⑴　百足塚古墳の調査

百足塚古墳は墳長76.4m、後円部径32m、前方部幅43.6mを測り、前方部をほぼ正南にむけ、周囲に盾形周溝を有する２段築成の前方後円墳であることが判明した。墳丘は東から西への傾斜面に立地し、盾形周溝は東側では確認できるが、西側では等高線の実測でようやく痕跡を認め得るような状態であった。また北西部の周溝に近接して円墳（62号墳・63号墳）が２基あり、百足塚古墳に従属的な陪塚の可能性が高い。

百足塚古墳では平成５～６年度には指定地の追加を行う確認調査として、62号墳・63号墳を含んだ範囲にトレンチを４本設定した。その結果、それぞれの古墳で周溝が確認でき、62号墳と百足塚古墳には大量の埴輪が樹立されていたことがわかった。検出できたのはほとんどが円筒埴輪で、川西編年のⅤ期に該当するため、両古墳は６世紀に築造されたことが判明した。

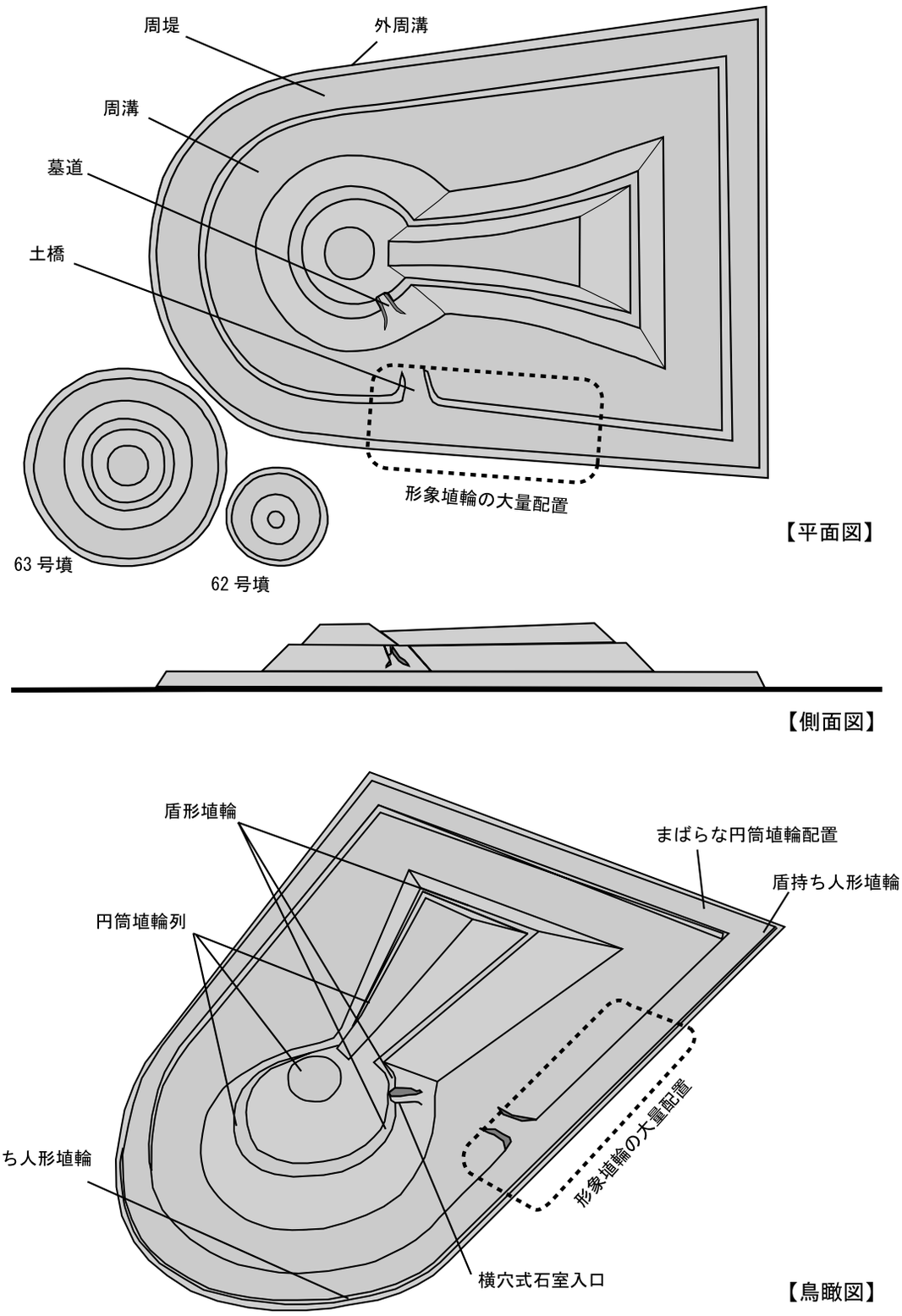

図３　百足塚古墳の復元模式図

平成９年度からは、史跡整備を目的とした調査を開始し、百足塚古墳に近接する62・63号墳の周溝の位置を把握する調査区（Ⅰ区)、百足塚古墳後円部西側周溝を確認する調査区（２区）を調査し、それぞれ周溝と転落した埴輪片、弥生時代中期の住居址３基を検出した。また前方部西側に設定したトレンチからは多くの形象埴輪片が出土した。

平成10年度から12年度には形象埴輪の配置や内容を確認するため、前方部西側周溝から後円部西側周溝に調査区（２区・３区）を設定した。調査の結果、周溝と同様に完周する「周堤」の存在とそこに樹立されていたであろう大量の形象埴輪が確認できた。周堤の外側には現在では部分的にしか確認できない外周溝（幅約50㎝）があり、このことから周堤の幅は約６ｍであることがわかった。また周堤から西側クビレ部にむかう幅２ｍの土橋の存在も確認できた。形象埴輪の出土箇所はこの土橋から南側の周溝と外周溝内にいたる約40ｍにも及び、形象埴輪による祭祀行為はこの土橋から周堤上にあったと予想される。形象埴輪片の出土点数はプラスチックコンテナケースで約400箱にも及び、その数と種類は西日本でも類例の少ないものである。

平成13年度からは墳丘と東側周溝の確認調査を開始した。周溝は各所で立ち上がりが確認でき、おおよそ盾形周溝が確認できることが判明した。また後円部に設定したⅣ区で埋葬主体と考えられる横穴式石室の閉塞部が確認できた。調査は閉塞部の取扱いを残し、すべてのトレンチは調査終了している。

⑵　新田原59号墳

平成17年度からは新田原59号墳の確認調査を開始し、墳丘主軸と後円部・クビレ部のトレンチを設定し、墳丘の遺存状況の確認を行った。１トレンチでは、家と鶏の形象埴輪片が外堤から転落した状態で検出でき、４トレンチでは外堤の外側から須恵器が集中して破砕した状態で見つかった。墳丘は２段築成であり、１トレンチでは墳頂とテラスで円筒埴輪列が遺存していることが判明した。５トレンチの前方部ではテラスに円筒埴輪が６本並んでいる状態が良好に検出できた。

平成18年度の調査では後円部西側に設定した８トレンチ、クビレ部附近に設定した９トレンチ、前方部の東西に設定した６、７トレンチを調査し、６トレンチではテラスに円筒埴輪列の遺物を検出できた。

平成19年度の調査では、くびれ部と前方部両隅角の確認調査を行なった。

特に注目されたのは、外堤から周溝に転落した形象埴輪で、これまでの調査から推測すると、形象埴輪が数多く樹立されたのは、60号墳（円墳）に面した外堤の上であった可能性が高い。

以上３ヵ年の調査で、おおよその墳丘形態がわかるようになっている。

写真２　調査中の百足塚古墳

写真３　祇園原古墳群の前方後円墳群

Ⅲ．平成20年度の事業

１．事業の概要

⑴　事業の概要

今年度の事業は古墳群史跡整備実施計画から、百足塚古墳（新田原58号墳）の復元整備及び出土遺物の整理作業を行い、それに関連するソフト事業を展開した。

平成19年度には、今年度からの史跡整備の作業を進めるにあたって、国史跡の追加指定を申請し、平成20年７月６日に告示を受けている。

百足塚古墳の復元作業にともなう環境整備及び丁張設定を11月から12月まで行い、復元作業のための確認調査を12月から１月にかけて、復元作業を1月から３月にかけて、それぞれ進めてきた。

表２　平成20年度の事業概要

事業内容／月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
58号墳の復元設定作業							―	―	―			
58号墳の確認調査									―	―		
58号墳の復元作業										―	―	―
58号墳の出土遺物整理									―	―	―	―

⑵　出土遺物の整理作業

今回の作業にともなって包含層や撹乱土からは、多くの埴輪片が出土している。これらの洗浄と出土位置をしめすナンバリングを行い、かつての確認調査で検出している出土埴輪との接合作業を行った。

⑶　地域と共同した復元整備

百足塚古墳の復元整備に活用するため、子ども達と一緒に埴輪をつくる作業を行った。平成18年度から数えて３回目となり、これまで製作された埴輪は100本を超えた。

２．事業体制

本事業は新富町教育委員会が主体であり、県文化課及び新田原古墳群史跡整備専門整備検討委員会の指導のもと行った。平成20年度の事業体制は下記のとおりである。

【平成20年度の発掘調査体制】

○ 総　　括　　米良　郁子（新富町教育委員会教育長）
　　後藤　博己（同　生涯学習課長）
　　金丸　雅弘（同　生涯学習課長補佐）
○ 庶　　務　　有馬　義人（同　生涯学習課文化振興係長　庶務担当）
○ 調　　整　　有馬　義人（同　生涯学習課文化振興係長　文化財担当）
○ 調　　査　　樋渡将太郎（同　生涯学習課主任主事　埋蔵文化財担当）
○ 指　　導　　小田富士雄（新田原古墳群史跡整備専門検討委員：福岡大学名誉教授）
　　柳沢　一男（新田原古墳群史跡整備専門検討委員：宮崎大学教授）
　　森本　幸裕（新田原古墳群史跡整備専門検討委員：京都大学教授）
　　東　　憲章（宮崎県教育庁文化財課埋蔵文化財係主任）
○ 作　業　員　　杉尾美千子、坂本貞夫、清美喜子、溝口敦子、甲斐直美、福島将太、
　　沼口未菓、清　久夫、芳野弘征、岩本　勉、柳田　弘、興梠　宝、高山政雄、
　　本部定臣、米谷房喜、税田道人、高山　一、図師満坦、宇都宮正臣

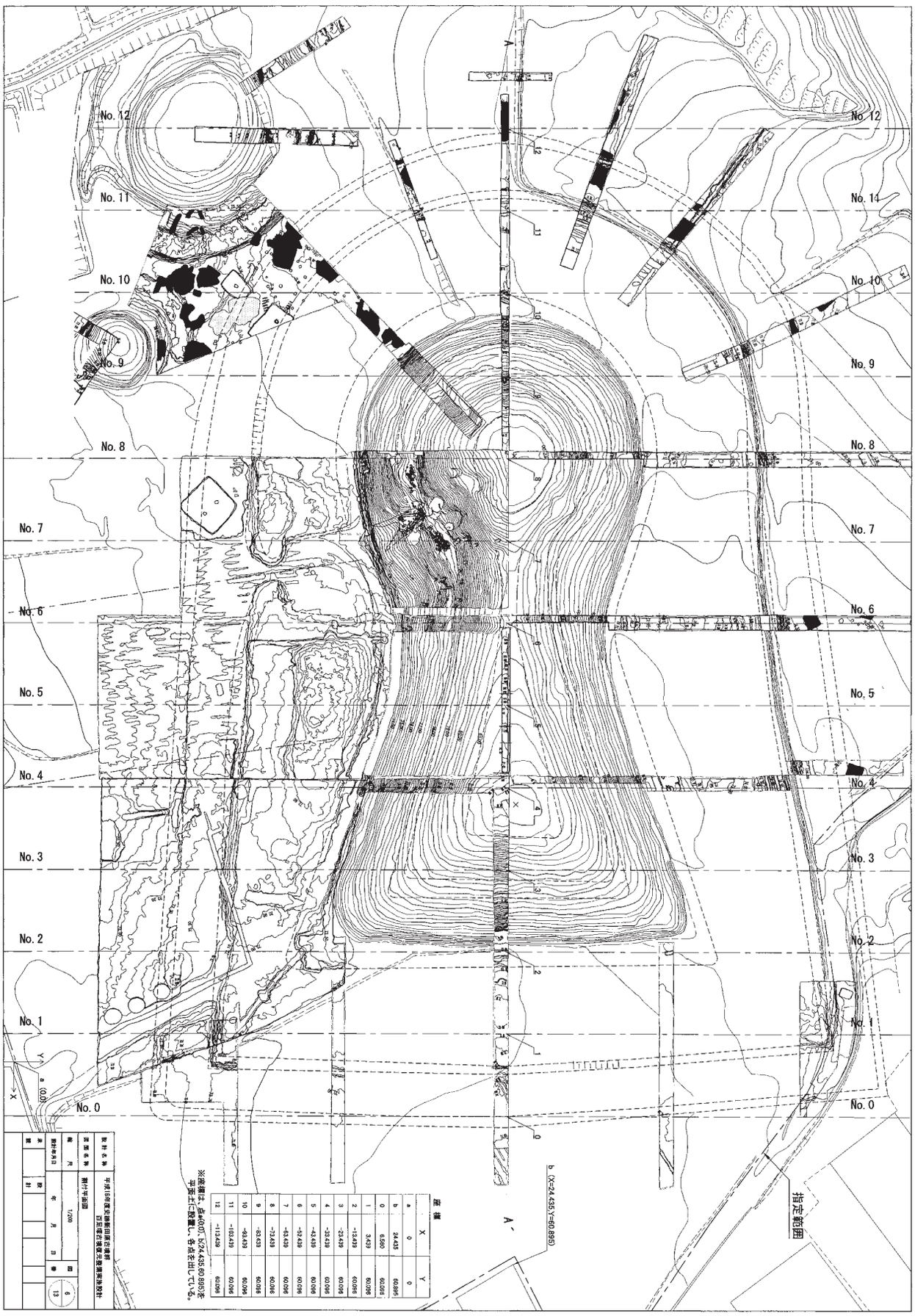

図３　百足塚古墳の復元設計図

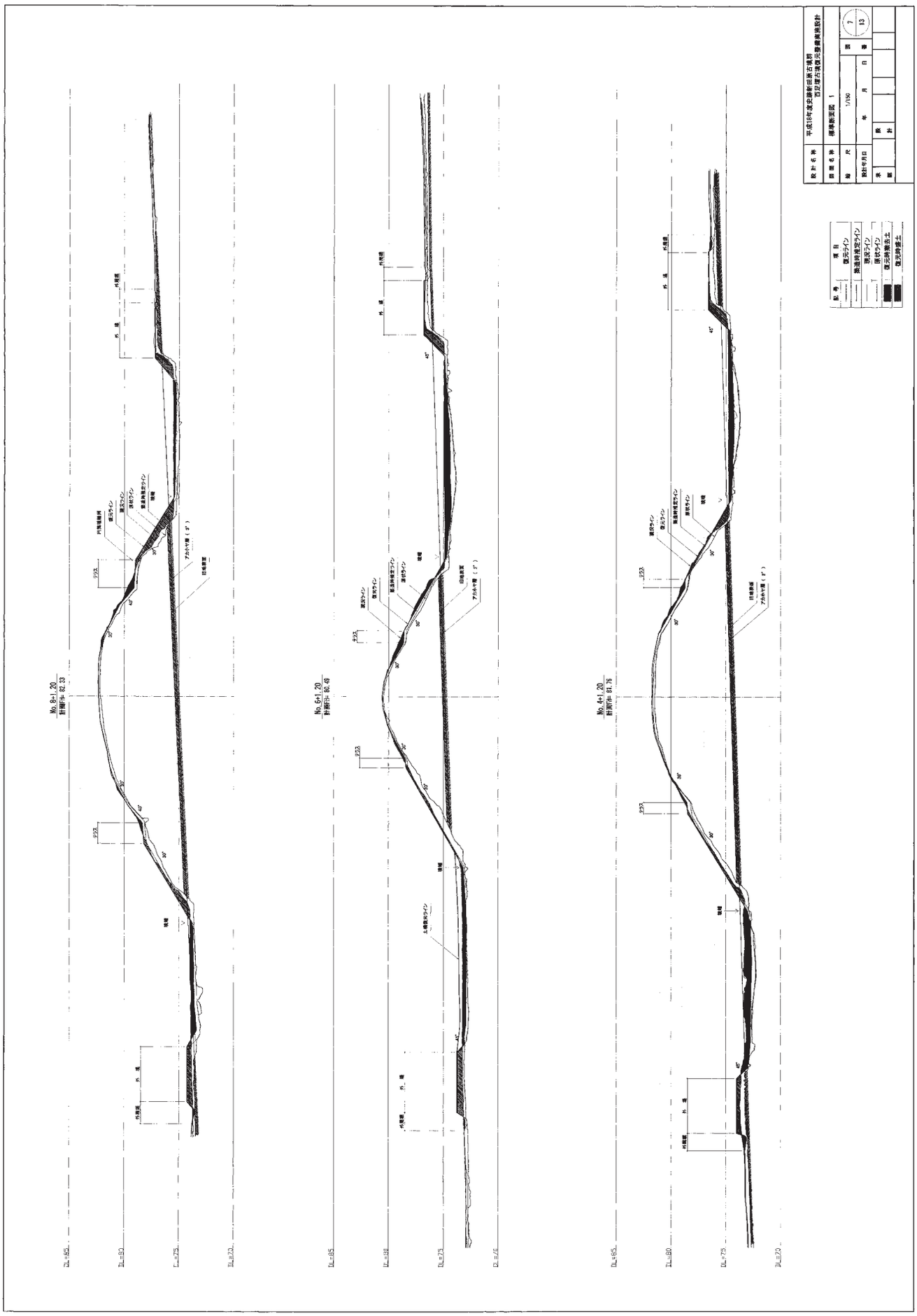

図４　百足塚古墳の復元設計図（断面図）

３．整備作業

⑴　整備の方針

百足塚古墳の整備については平成18年度に整備実施設計を策定した。

その方針は、二段築成の墳丘をテラスを表現することによって、築造当時のように明瞭化し、周溝や外堤を完周させることである。

具体的な方法として、古墳中腹に巡るテラスと周溝に堆積した埋土を除去し、長い年月のうちに掘削された墳端に集めて復元することとしている。

埋土を除去する際には、確認調査のデータと作業前に行う試掘のデータから、遺存する遺構面から少なくとも20㎝以上の保護面を残すこととし、極力人力で作業することとした。

特に円筒埴輪列が残る墳頂とテラス面は細心の注意をはらうこととしている。

また復元の際には、木杭と板材を利用した丁張を設定し、現地でその状態を判断して作業を進めることとした。

作業着手前には、設計の断面図をもとに復元作業を行うよう準備をしていたが、確認調査で測定した各調査区ごとの所見が必ずしも一致しておらず、結果として、テラスや墳端部で作業を行うことに支障があることが予想された。そこで、再度平面図と断面図の整合性を確認することになった。

結果、遺構面の保護を最優先とし、古墳のほぼ南北方向にむく主軸上では、テラスを水平とした。主軸と直行する東西側では、東から西に均一

写真４　百足塚古墳南西方向から

写真５　墳丘西側に設定した丁張

写真６　後円部東側に設定した丁張

写真７　墳丘北側の外堤から後円部

写真８　東側前方部隅角から墳丘

写真９　東側前方部隅角から前方部

な傾斜をもたせた。以上の想定のもと、平面図からテラスの内外の側点の高さを計算し、断面図と見比べる作業を進め、ほぼ整合性のある復元案となった。

また盛土後の表面養生については、今後の管理と費用面も考慮し、埋土に含まれる埋土種子の発根を利用し、芝張りなどは行わないこととする。盛土終了後一定期間は丁張を残し、丁寧な草刈を行いながら表面養生を進めたい。

⑵　各復元作業における所見

後円部

後円部の平面形は、確認調査のデータから、墳頂・テラス・墳端では、同心円にはならず、それぞれに中心点が異なることがわかっている。

そのことから、後円部は１点から放射状に均一な長さの側転を割り振ることはできず、平面形をもとにして、各丁張りを設定すべき座標を計って、測量することとした。

第１段はテラスから墳端までは直線で結んだ傾斜に仕上げるようにした。その角度はおおよそ30度程度となる。第２段は、調査データから、屈曲を描くような傾斜になるため、均等に屈曲点を設けるような丁張を設定した。墳頂はやや東側が高い平坦面で南北方向に長い楕円形で現状に近い面をつくるようにした。

テラスは後円部の北側で最も広く幅2.4mを計り、くびれ部に近くなるほど狭くなる。

作業は丁張に基づいて、第２段からテラスまでの埋土を人力で掘削し、第１段に寄せ

る作業を進めた。第１段は周溝の埋土と一緒にテラス付近の埋土をあわせて重機による点圧を施して形をつくり、人力による表面仕上げを進めた。

くびれ部・土橋・前庭部・墓道

くびれ部の形状は、調査の所見からもはっきりとした変換点がなく、ゆるく前方部から後円部にいたるようになっていた。このことから調査データを尊重して現状の堆積土を均一に剥ぎ取る作業を行い、テラスから墳端部までの直線を施す際に不足する部分には盛土を行うようにした。

墳丘西側には、後円部のテラス付近からくびれ部にむけて開口する横穴式石室がある。今回の作業では石室の取り扱いは行わないが、次年度の作業で墓道の形状だけは復元する予定である。

西側の墳端部には土橋と前庭部が存在する。確認調査の段階では、多くは掘削されて、その平面形しかわからなかったが、調査検討委員会での議論から、外堤から墳丘に同じ高さでつなげるようにするべきとなったことから、現状の周溝底から50㎝以上の高さの前庭部と土橋を復元することになった。

前方部

後円部と同様に二段築成の墳丘を復元するよう作業を進めた。墳頂はくびれ部からバチ形にひらく形状となっており、陥没した穴などを埋めながら平坦面を整えた。１段目も２段目もややバチ形に開く形状となっているため、各丁

写真10　東側の外堤を南から見る

写真11　前方部前面の周溝と外堤

写真12　前方部前面の重機による作業

写真13　墳丘西側の重機による作業

写真14　墳丘西側の重機による作業

写真15　西側外堤の重機による作業

張からの屈曲のさせ方に工夫が必要となった。テラスは調査所見から側面で１m、前面で２mの幅を有し、いずれもやや外側に傾斜させるよう設定している。

第１段はテラスから墳端まで直線で結び、その傾斜角は30度程度である。第２段は側面と前面のいずれもテラスからの立ち上がり部分に屈曲箇所があって、丁張の設定にやや工夫が必要となった。第１段と第２段のいずれにおいても隅角は直線で結ばず、現況から判断して緩い屈曲をもたせるよう設計を変更した。

周溝

先に示したとおり、厚く堆積した埋土のうち畑耕作などですでに撹乱された土を中心に、剥ぎ取りを進めた。

埋土の多くは耕作土で、埴輪を中心とした遺物包含層とは明瞭に土質が異なることから、重機による剥ぎ取りで作業を進めた。

事前の調査所見から、東西両くびれ部に近い位置と、前方部前面には、周りの雨水が集まるように低くなった箇所があり、すべて調査データと現況から判断して自然な傾斜ができるよう努めた。

外堤

外堤は、現状ではすべて失われ、もともと高まりがあったかはわからない。

外堤の存在を予見させるものは、周溝の外６mに並行して巡る外周溝であり、その中に転落した埴輪片である。

今回の整備では低いところ

で約50㎝の「堤」を完周させることとしている。古墳の立地する地形がもともと東から西への傾斜地で、この立地にあわせて傾斜させるような復元作業となった。また南側の前方部前面ではほぼ古墳の主軸の延長線上で屈曲するような平面形になっている。

東側の外堤はもともと急な崖状になって遺存していたが、平面形を整えて傾斜が極力緩くなるよう工夫した。

写真16　前方部前面における人力作業

作業を進める上での課題

今回の作業は基準の設定から、最終的な仕上げまで、文化財の調査と同様、ほぼ直営の人力作業で行った。

試験的な作業ではあるが、埴輪片の保護を目的とし、比較的水はけがよいことと、表面養生がしやすいという好条件に恵まれていた。

また墳丘の復元傾斜角度が30度を大きく超えないという条件も直営での作業を可能としたといえよう。

ただし、重機で圧力を加えた部分と人力で叩き締めを行った部分で、時間がたってからどの程度の変化があらわれるかという課題が残る。次年度の作業で補正を加えていきたい。

写真17　前方部前面テラスの整地作業

今後の作業の進め方

今回の作業で盛土を中心とした整地作業が完了した。次年度は墓道と前庭部の整備と今回作業を行った部分の養生を検討する。

写真18　後円部第２段における作業

写真19　親子の粘土をこねる参加者

写真20　粘土帯をつくる

写真21　形になってきた作品

４．地域で協働のはにわづくり

平成18年度から行っている埴輪づくりは３年目となり、これまでに作製されたはにわも100本を超えた。

同事業は、新富町教育委員会生涯学習課が進める「子どもの体験学習支援事業」のうちの一つで、古墳の所在する上新田小学校区域の地域と子ども達で構成する「上新田っ子を育てる会」の活動の一つである。11月６日に行われたはにわづくりには、同じく生涯学習課が設置している「放課後子ども教室あおぞら」と、新富町ジュニアリーダー養成教室の子どもたちも参加し、約30本の埴輪ができた。

この際製作された埴輪は、百足塚古墳で発見される円筒埴輪の８割を予定していた。実際の円筒埴輪は約60㎝程度で底径20㎝を計るが、本物と同様の大きさの作品を作るためには、半日から１日程度の時間が必要となるため、２時間程度で製作できる大きさとしている。

しかしながら、参加対象の子どもが低学年であることや、指導者の製作技術や人数の問題から、本物の埴輪に近い作品ができない実情にある。

そのため、本年度末に担当者を群馬県高崎市かみつけの里博物館が主催する「はにわづくりプロジェクト6000」に派遣し、同博物館の皆さんから指導者と製作方法そして、住民参加行事の進め方の指導を行っていただいた。

今後はより現物に近い円筒埴輪を地域のみなさんと製作し、周辺の環境整備や憩いの空間づくりについて、ともに考える協働の史跡整備をすすめていきたい。

５．出土埴輪等の展示

百足塚古墳の出土埴輪の展示貸し出しを本年度も行った。実績は下記のとおり。

宮崎県立西都原考古博物館	貸出期間	平成20年６月から同21年３月
	資 料 数	12点
宮崎県立総合博物館	貸出期間	平成20年11月から12月
	資 料 数	14点

また、西都原考古博物館に貸し出しを行った際、同館の配慮から資料の写真撮影を行っていただき、写真寄贈の提供を受けた。

Ⅳ．まとめ

本年度は、百足塚古墳の整備を開始した。同古墳は平成９年度からの調査で多数の形象埴輪が出土し、その種類と数、そして出土位置などから西日本でも有数の埴輪採用古墳として注目を集めた。その後、大阪府高槻市の今城塚古墳の調査によって、その類似点なども指摘され、中央政権と地域首長の関係を考える重要な資料としても再評価できる内容となったといってよい。

整備は、埴輪片を数多く含む軟弱な黒色土を人力で盛土する必要があるため、直営による作業で行っている。今後の養生面も含め変化を見守りたい。

また平成21年度には周辺の円墳２基を含む範囲の整備実施設計を策定し、一部確認調査も加え、平成22年度には周辺までの整備を完了させたいと考えている。

今後の作業も慎重に進めていきたい。

写真22　西都原考古博物館の展示状況

写真23　建物と犬の展示状況

【参考文献】

(1) 宮崎県『宮崎県史叢書　宮崎県前方後円墳集成』1997

(2) 柳沢一男「日向の古墳時代前期首長墓系譜とその消長」『宮崎県史研究』第14号　1995

(3) 岸本直文「前方後円墳築造規格の系列」『考古学研究』第39巻２号　1992

(4) 高橋克壽「西都原171号墳の埴輪」『宮崎県史』第７号　1994

(5) 樋渡将太郎「町内遺跡19」『新富町文化財調査報告書』第35集　新富町教育委員会　2003

(6) 有馬義人「新田原古墳群」『宮崎県史叢書　宮崎県前方後円墳集成』宮崎県　1997

(7) 藤本貴仁「宮崎平野部の群集墳」『宮崎考古』第16号　1998

(8) 文化財保存計画協会編『新田原古墳群史跡整備基本計画書』新富町教育委員会　1996

(9) 梅原末治「日向西都原付近の古墳」『歴史地理』第25巻２号　歴史地理学会　大正４年

報　告　書　抄　録

ふ　り　が　な	ぎおんばるこふんぐん 12
書　　名	祇園原古墳群12
副　書　名	平成20年度　発掘調査概要報告書
巻　　次	12
シ リ ー ズ 名	新富町文化財調査報告書
シリーズ番号	第 54 集
編　集　者　名	有馬　義人
編　集　機　関	新富町教育委員会
所　在　地	宮崎県児湯郡新富町大字上富田7491番地
発 行 年 月 日	２００９年　３月

ふりがな 所収遺跡名・地区名	所　在　地	コ　ー　ド		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号			
にゅうたばる 新田原58号墳	おおあざにゅうたあざひがしま 大字新田字東俣	47	1001	0801106 ～ 090331	約10000㎡	史跡整備

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
にゅうたばる 新田原58号墳	古　墳	古墳時代	前方後円墳	埴輪・須恵器	円筒埴輪列

新富町文化財調査報告書　第54集

祇 園 原 古 墳 群 12

発行年月日　２００９年３月
発　　行　宮崎県新富町教育委員会
印　　刷　㈱印刷センタークロダ